２０２３年１１月１２日（聖霊降臨後第２４主日、特定２７、A年）
牧師メッセージ

「目を覚ましていなさい」

（マタイによる福音書 25:1-13）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音の最後、主イエスは「目を覚ましていなさい」と命じました。これが今日の福音で主イエスがわたしたちに伝えようとしていることです。

十人のおとめたちは、「皆眠気がさして眠り込んでしまった」とありますから、賢いおとめも、愚かなおとめも眠ってしまったようです。では「目を覚ましている」とはどういうことなのでしょうか。それは、「油を用意している」ことです。五人の愚かなおとめたちが油の用意をしていなかったのに対し、五人の賢いおとめたちは油を壺に入れて持っていました。賢さを示すしるしは「油」なのです。

今日の福音は、終末の時を婚礼にたとえています。来るべきその時、決定的な区別をもたらすものこそが油です。油は婚礼の行列や、祝宴を照らすためのともし火に不可欠なものです。油がなければ、ともし火は消えてしまいます。マタイによる福音書では、ともし火は「善い業」を表すたとえとして描かれています（マタイ 5:16「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行動を見て…」）。わたしたちは油に火を灯し、善い業をもってこの世界を照らすことが求められているのです。そのために、神はわたしたちにすでに油を与えてくださっています。その油が切れてしまえば、ともし火は消えてしまい、わたしたちは「世の光」として生きることができません。そして、賢いおとめたちが油を分けることを断ったことに表されているように、わたしたちに与えられている油は分けることができないものです。それぞれが与えられている油に明かりを灯し、油を切らさないようにしなければならないのです。

油を切らさないためには、主イエスとの交わりにとどまらなければなりません。愚かなおとめたちは、花婿が到着しようとしているのに、そこから離れて油を買いに行ってしまいました。しかし、それが本当にその時にすべきことだったのでしょうか。油が用意されていない「今」、最も大切にしなければならないことは何かを彼女たちは考えるべきでした。新約聖書において、主イエスと教会は花婿と花嫁にたとえられます。花婿が主イエスならば、主イエスが近くに来ているのに、その場を離れることなど良い選択であるはずがありません。花婿を迎えに出ることこそ、おとめたちが「今」すべきことであったのです。しかし、愚かなおとめたちは油に気を取られ、肝心なことを見失ってしまいました。そこに彼女たちの愚かさがあるのです。そもそも、花婿を迎えることの大切さを感じていたなら、油の用意をしていたことでしょう。そのようにはじめから大切なものを見失ってしまっていた愚かなおとめたちは、油を切らしてしまったことにばかり気を取られ、もっとも大切な花婿を迎えることができなかったのです。

「目を覚ましていなさい」とは、「今」しなければならないことは何か、問い続けなさいということです。平素から、自分が何を大切にしているかが問われます。主イエスとの交わりの中でこそ、神の目で、「今」わたしたちがすべきことが知らされます。そのことこそが「目を覚ましている」ことにほかなりません。